



# マウル

MAUL-MANDULGI

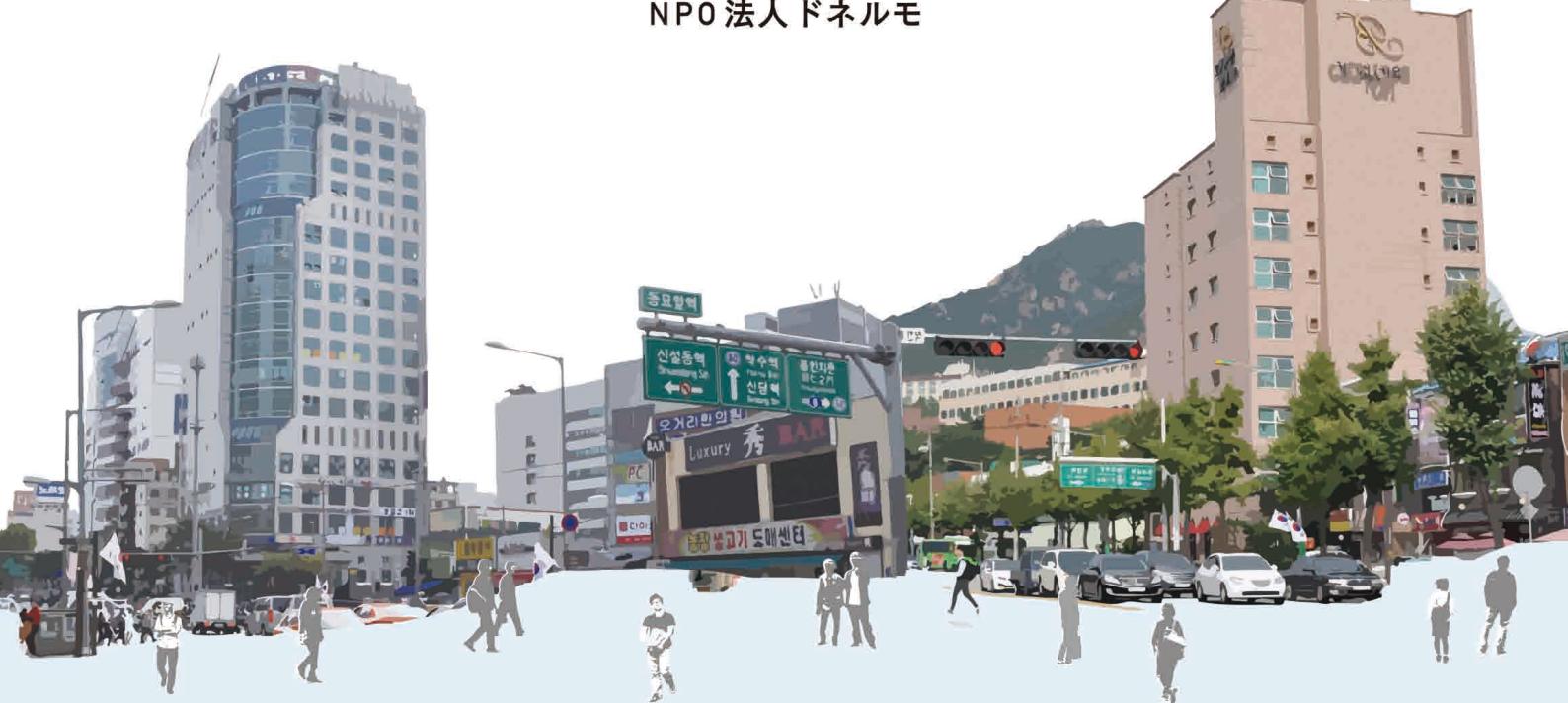
# マンドゥルギ

## 韓国視察レポート

# 2014

NPO法人アカツキ

NPO法人ドネルモ





経済の高度成長に伴い、開発中心の都市化が無分別に進行した韓国では、国民の4分の1がソウルに集中し引越し率も20%、都市部の人々のつながりは弱まる一方で競争は激化。その不安とストレスによる生活の質(QOL)低下をフォローし回復することが喫緊の課題となっています。この問題に対し、個々の課題を国が決定し解決策を当てはめるのではなく当事者が自ら課題を見出し・解決していく方向性への転換が、韓国では社会レベルで図られました。そこで注目されたのが、前回の視察で訪れたソンミサン・マウル。個人の問題意識に発しながらも、多様な人が関わり、やりがいや知恵を分かち合う互恵的なつながりが、そこにはありました。

そんな「わたし」から「わたしたち」へのプロセスが、では具体的にどう生まれ、どう支援されるのか。今回の視察のポイントはこの点にあります。とくに①「わたしたち」のつくりかた(コミュニティ)②お金について③支援を巡る評価のやり方の「3つの視点」から、それぞれの視察先を検討しています。

終わりのない「わたしたち」をつくる旅は、今回「マウル・マンドゥルギ(マウルづくり)」を巡るものとなりました。その旅程で見つけた様々な“小さなスイッチ”を、みなさんと共有したいと思います。

もくじ	2
「わたし」を「わたしたち」へとつなぐ“小さなスイッチ”	3
3日間の行程	4 - 5
視察先1 希望製作所	
概要	6 - 7
3つの視点	8 - 9
視察先2 ソウル特別市マウル共同体総合支援センター	
概要	10 - 11
3つの視点	12 - 13
視察先3・4 ソンデコル・マウル / チャンシン・マウル	14 - 15
視察先5 seed:s	
概要・3つの視点	16 - 17
ふくおかでもできるかも!	18 - 19
クレジット / 支援者のお名前	20

## 韓国視察の行程

3  
日間



### 視察先 5 seed:s

seed:s の入っている建物は豪奢な面構え。でも、seed:s 代表はソンミサン住民だったり、部屋にあった座布団が前日視察した「000間」(チャンシン・マウル)の制作物だったり。韓国のソーシャルなつながりを感じた最終日でした。



### 2日目の振り返り

ホテルのカフェにて。支援先マウルから戻ってまもなく、熱気のあるコメントが交わされました。



### 視察先 2 マウル総合支援センター

昨年も訪れたマウル支援センター。今回センターの方には、ソウル市役所の方や2か所の支援先マウルのコーディネートなど、こちらの欲張りなお願いに、とても丁寧にご対応いただきました。大感謝！



### 視察先 1 希望製作所

仁川空港から直接現地へ向かったのですが、なんと最寄りの地下鉄駅を乗り過ごし、大慌てでタクシーを捉まえる羽目に(到着はギリギリ)。希望製作所ではコーヒーやお菓子で温かくおもてなしいただきました！



16:00 < 10:00

3  
日目

18:00

13:00

10:00

2  
日目

21:00

19:00

15:00

1  
日目



### 3日目の振り返り

空港の出発ゲートにて。恒例となった「視察で一番輝いていた人」を選ぶ最終ふりかえり、今回のMVPは孔さんでした！

### 視察先 4 チャンシン・マウル

古い建物が立ち並ぶチャンシンのまち並みは、韓国映画のロケ地もかくやと思わせるほどにフォトジェニック。案内してくださったキムさんに連れられ、迷路のような路地を歩きました。また行きたい！

### 視察先 3 ソンデコル・マウル

ソンデコル視察のクライマックスは、なんと演劇。視察日の翌日に開催予定のエネルギー祭りで上演する劇を、練習がてら見せてくれたのです。子供たちも元気よく参加、節電をPRしていました。



### 懇親会

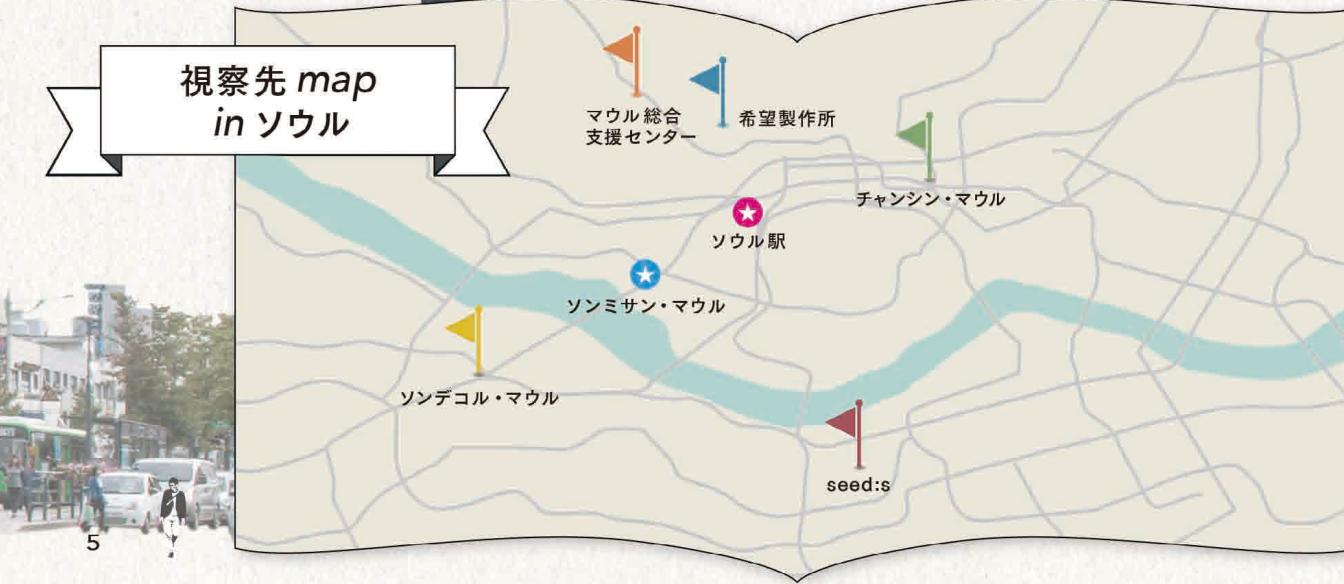
昨年の視察でも懇親会で訪れた明洞のお店で、ポッサムをはじめ韓国料理に舌鼓。でも、どうしたわけか注文しないチヂミが大量に運ばれてきて、持ち帰ることに。(メンバーがホテルで美味しいと勧めてくれました。)



### 1日目の振り返り

ホテル隣の屋台で(ノンアルコール!)。ふりかえり中、屋台のおばちゃんがしきりにお酒を勧めてくれました。

### 視察先 map in ソウル



# 希望製作所



希望製作所設立当初からの中心メンバーであるユ・シジュさん(写真左) / ドネルモ × アカツキ視察メンバーから質問の様子(写真右)

デザイナー業を営んでいた支援者に依頼して設計した、鮮やかな応接スペース

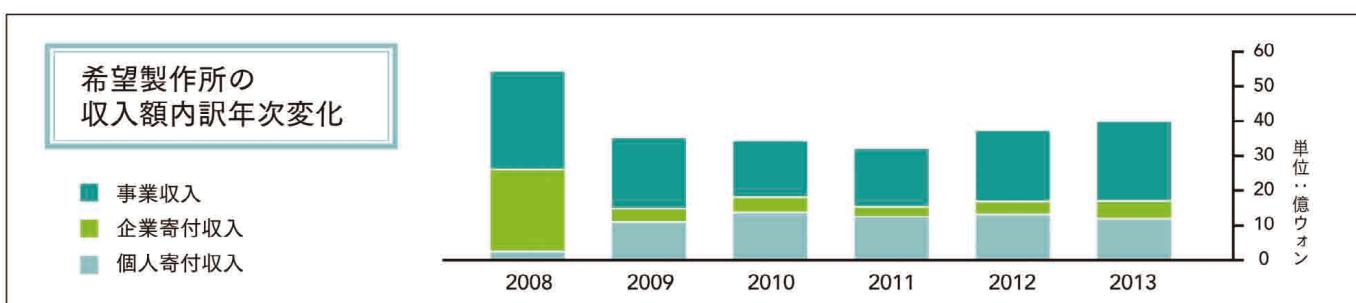


## /// 課題と宿命

希望製作所では、事業と研究の両方を並行して行っていますが、事業に時間をとられすぎるとレポートの発行数が減り社会的な影響力が減少するため、いかに研究にかける割合を増やしていくかが課題です。また研究の中でも地方自治体の委託を減らし、重要ながまだ誰も手をつけてないテーマの自主研究への取り組みと、市民が参画しやすい仕組みづくりを重視しています。

## /// 求める人材像

希望製作所の職員に求められるのは、次のような人材像だと言います。あらゆる能力を備えた〈Creative Generalist〉、前例がない問題を常に自分で考えイノベーションを起こしていく〈Social Designer〉、行政・企業・市民の壁を乗り越えて共有できる価値を見出す〈Super Coordinator〉、理論と実践を兼ね備える研究者である〈Public Scholar〉です。



	年	2008	2009	2010	2011	2012	2013
総収入(億ウォン)	54	35	34	32	37	40	
収入内訳							
事業収入(億ウォン)	28.6	20.6	16.3	17.2	20.7	22.8	
寄付収入(億ウォン)	25.3	14.3	17.6	14.7	16.2	17.2	
寄付収入内訳							
個人寄付収入(億ウォン)	2.0	10.6	13.4	12.0	12.6	12.0	
企業寄付収入(億ウォン)	23.3	3.7	4.2	2.6	3.5	5.1	

	年	2008	2009	2010	2011	2012	2013
収入内訳							
事業収入の比率(%)	53	59	48	54	56	57	
寄付収入の比率(%)	47	41	52	46	44	43	
寄付収入内訳							
個人寄付の比率(%)	8	74	76	82	78	70	
企業寄付の比率(%)	92	26	24	18	22	30	

## シンクタンクの4大要素

そもそもシンクタンクとはどのような組織なのでしょうか。一般的には〈政府や行政だけに政策立案や妥当性の検討を委任するのではなく、民間の学術的な力でデータや事実に基づいた理論を構築し、客観的に説得力のある政策の提言や評価を行う研究機関〉と言えるでしょう。その価値と性質は、“公益”に役立つとい

う目的意識、“非営利”的なビジネスモデル(寄付や会費を積極的に扱うなど、資金拠出者と成果物の受益者が異なるもの)、“民間”的組織形態、“独立”した財源確保、の4大要素で表現できます。

世界では欧米を中心に様々な形態のシンクタンクが発展していますが、日本のシンクタンクの特徴としては、企業がその

営利活動のマーケティング調査等のために設立したものか、政府・行政の委託が研究の中心となっている機関が多いため、研究の結果が公益的な性質を持ちにくく、政策に反映された事例も少ないのが実状だと言われています。

## /// 事業内容

希望製作所の事業は、設立からの約8年間で大きく変化しています。

設立当初の中心事業は、〈オンライン型市民アイデアバンク〉など、市民が課題だとと思っていることやその解決策の報告・提案を集め、専門的な研究者が修正・補完・強化していく中で、政策に発展させていくものでした。

現在力を入れている事業は、企業から調達した資金を元に、NPO・IT関係者・デザイナーなど、幅広い分野・業界から人が集う短期間の合宿で革新的なサービスを開発する企画。また、「地域の活動は国の根幹」という認識を持ち、中心都市であるソウルと大きな格差のある地方の活性化事業などです。

## /// 理念・目的

希望製作所は、46人の研究員を雇用、年間予算は日本円にして約4億1千万という韓国最大規模のNPOです。自分たちの役割を「韓国社会の進歩に貢献するために、よりよい社会に進む代案(オルタナティブ)を、実事求是(事実の実証に基づいて、物事の真理を追求すること)の方法で、市民と共に想像/探索/研究して実験/実行する独立的な民間教育所」と定義しています。

特に強調されていたのは、〈Think & Doタンクによる市民活動〉という部分です。そのため、研究機関でありつつも、批判や抽象的な議論ではなく具体的な実践を重視しています。あくまでも市民を中心置き、人々の知恵や力で経営を成り立たせているからこそ、政府のコントロールや市場のニーズから離れ、独立した活動を展開することができているとのことです。

## /// 収入構造

2008年時には総寄付額25億ウォンのうち92%を企業から得ている状態でしたが、2009年に当時のイ・ミョンバク大統領が市民団体へ寄付を行う企業への弾圧を実施したため、26%まで激減。当時は大きな危機に陥ったそうです。その後、財政構造の改革を行い、現在では個人からの寄付が総寄付額の70~80%を占めています。

## /// 国内での役割・背景

韓国では長期にわたる軍事独裁政権の影響で、権力(政府)に対する批判・監視が民主化後(1990年代以降)の市民活動の潮流でした。しかし、結果として残ったのは「批判だけでは何も始まらない」という反省であり、現在では、「自分たちで社会をつくる」という新たな動きが生まれました。その代表が2006年3月に創立された希望製作所です。



オフィススペース。研究員は委託を含め46名が在籍している(写真上) / 希望製作所が発行した本やレポートはこれまでに300冊を超える(写真中) / 打ち合わせスペースにも遊び心と明るい雰囲気が感じられる(写真下)

## パク・ウォンスン氏の略歴

### 希望製作所をみる

# 3つの視点

## 1 コミュニティ 2 お金 3 評価

### Community

ソウル大学入学  
軍事独裁体制に反対するデモに参加したこと  
により投獄・除籍

司法試験に合格  
地検検事を経て、弁護士として活動開始

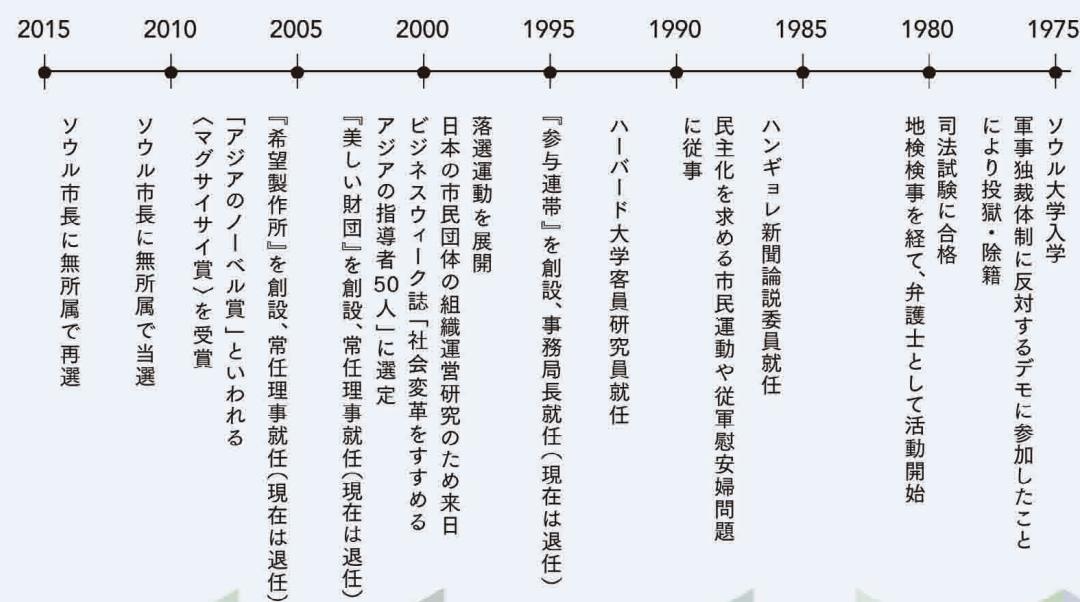
希望製作所の活動の成功と広がりの理由を明らかにするためには、創立者であるパク・ウォンスン氏の存在を語ることを避けたは通れないでしょう。

パク氏はソウル大学在籍中から民主化運動の旗手として活動しており、その後人権派の弁護士となりました。

2000年4月の総選挙において「参与連帶」という団体で、反人権・反民主主義的経歴の候補者へのネガティブキャンペーン(落選運動)を大々的に展開し、成功を収めます。加えて同時期に「美しい財團」と「美しい店」を設立、韓国に寄付文化とリサイクル文化を創造定着させており、希望製作所もまた財團の資金を元に設立されています。

パク氏はこれら様々な活動の功績から、国内外で多くのNPOネットワークとリーダーとしての高い評価を得ています。2011年にはソウル市長に当選。実は「マウル共同体総合支援センター」に関する施策も、彼が強く推進している施策の一つなのです。

希望製作所の「代案(オルタナティブ)」を出す」という強い理念は、ただポジティブなだけではなく、むしろ、パク氏の批判と闘争の歴史を背負っているからこそ現実的で力強いものになっており、多くの人の信頼と共感を得ているのだと考えられます。



### 2 お金

希望製作所のファンドレイジングには3つの特徴があります。1つ目は楽しんで仲良くなれる仕掛け、2つ目は自分の顔やメッセージが表に出されること、そして3つ目は寄付者が自ら寄付を集めてくる、ということです。

まずスタッフが支援候補者と初めて出会う際には、名刺に個人で異なる絶滅動物のイラストを載せ、会話のきっかけづくりに努力しています。実際に新規会員になると手作り食事会に招かれ、支援者だけの登山やハイキングで特別感を楽しんでもらえるように設計されています。

次に寄付の報告の段階です。日々多くの支援者、また支援候補者が訪れるというオフィスには、階段や廊下などあちこちに、事業報告書や、活動に関するイラストのポスター、また寄付者の名前や顔写真などが貼り付けられており、自分の寄付がどのように活動と成果に繋がっているのかを感じ、訪れて探したくなるような工夫がされています。

最後に、大口寄付の意欲がある支援者に対しては、「3年間かけて1004万ウォン(日本円で約100万円強)寄付する」というプロジェクトへの挑戦を求め、自分が付をするだけでなく、周囲の友人などにもチャリティバーティーへの参加や会員への入会を呼びかけることで、寄付を集めボランティアの役割を担ってもらっています。

支援者層のメインは3~40代のホワイトカラーで、報告は週1回メールでのニュースレターと年1回のアニユアルレポートが中心。全体を通して、何か特別な事をしていいるよりも、ファンドレイジングの基本であり王道の施策を、丁寧に行い続いているという印象を受けました。

### 3 評価

希望製作所は政府統計など既に社会に広く発信・把握されているデータに頼らず、直接現場に足を運んで培った独自の地域ネットワークを駆使して、より生活者の課題意識や潜在的ニーズを捉えた数字を自分たちであぶり出しています。更に、データを基にした事業を自分たちで立ち上げ、実施。その成功モデルが他地域でも展開されることや、政府や行政に制度化されることを、プロジェクトの真の成功と位置付けています。

自組織の主張や思想に基づく活動ではなく、広く市民の叶えたい(希望)に耳を傾け、その希望を叶えていく事がミッションだからこそ、成果に対する評価を、市民からの「金銭的支援」または「批判的意見」という形で受け止めています。その姿勢は、アドボカシー(政策提言)の語源が「代弁者」「権利擁護」であることを象徴的に表しているのではないかでしょうか。



寄付者の顔写真と一緒に書かれたバネルは、好きな位置を選んで掲示できる(写真右)／壁に飾られた星の中には、小さな字で支援者のお名前が書き込まれている(写真中)／スタッフの写真を、名刺に載せた絶滅動物とともにバネル掲示(写真左)

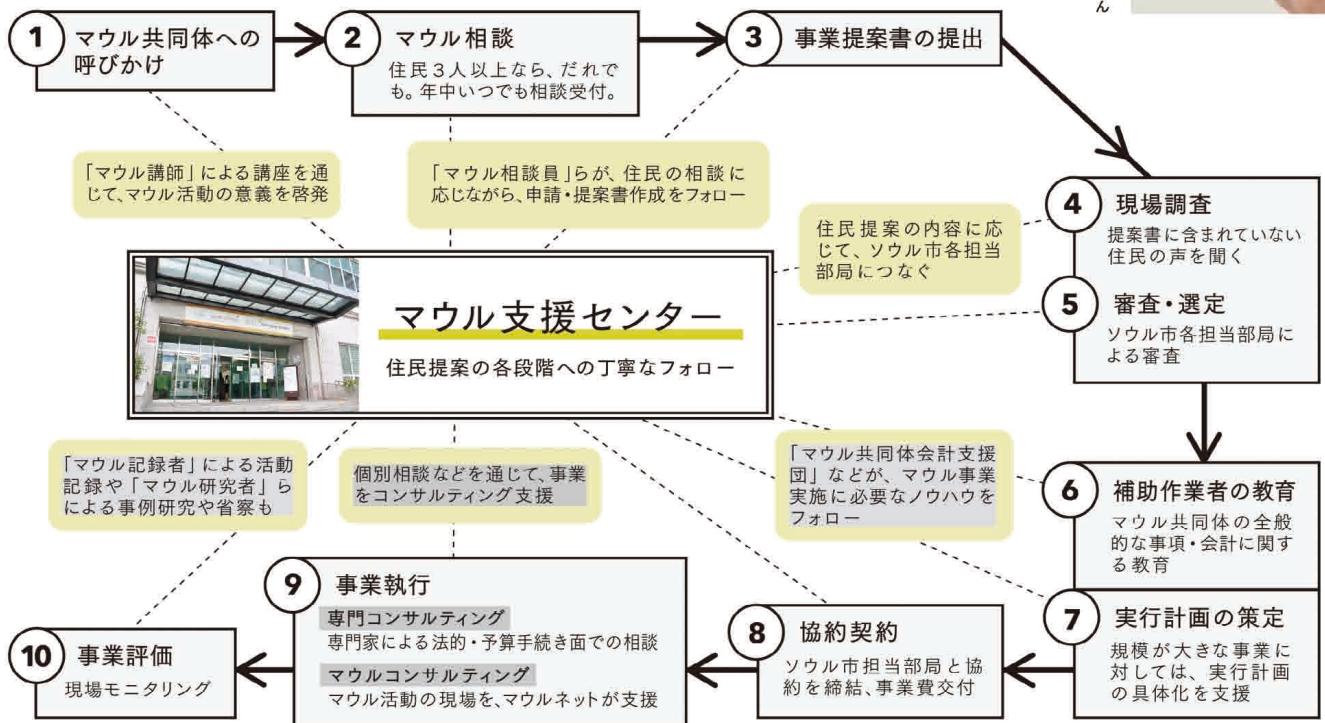
# ソウル特別市 マウル共同体支援センター



センターからの支援例。協同組合型マウル企業「エネルギースーパー」(写真右:ソンデコル・マウル)  
マウルメディアのラジオ局のチラシ(写真左:チャンシン・マウル)

## /// 支援のしくみ

住民の中で芽生えている問題意識や自発的な動きを、提案書に落とし込んで行政へとつなぎ、住民と行政が協働して事業を進め、更には自立して活動できるようになる。人々が最初の一歩を踏み出し、やがて活動家へと成長する一連のプロセスが、住民の自発性や問題意識の程度に応じて、丁寧にフォローされるしくみがつくられています。



## /// 取組みの成果

「自分たちのマウルをつくろう」と事業に関わってきたのは、ソウル市1000万人のうち、これまでで5.5万人。主体的な住民がこれだけ登場したこと、これから可能性が見出されています。



マウル共同体事業に  
参加した人の総数  
(2011~2013年)

54,623人

ソウル市役所のマウル共同体担当官 主務官イ・ジュンハクさん



## /// 開発型から住民提案へ

マウル支援センターの最大の特徴は、従来の行政主導による一方向的な開発ではなく、住民の必要に沿って、住民が計画し、自らマウル共同体をつくりていくための支援に特化しているところ。この住民提案のスタンスこそ、センター職員やソウル市役所のマウル共同体担当官、そして支援先マウル(チャンシンやソンデコル)の人々のお話に一貫して現れるテーマであり、ソウル市のまちづくりのコアなのです。

行政による一方向的な開発ではなく、住民提案型へ。もっとも、これはとくに珍しい話ではありません。福岡でも住民による自治のしきみ(自治協議会)が制度化されていますし、行政と住民が協働する取組みは日本でも多く行われています。ただその実相が、形骸化することなく、住民の問題意識に基づく主体的な提案として、行政を積極的に巻き込みながら、自分たちで自分たちの暮らしをつくりしていく営みになっているかどうか。つまり「ソンミサン・マウル」を、ソンミサン以外で生み出せるのかどうか。この問いに1000万人規模の大都市ソウル市は真正面から答えようとして、驚くべき柔軟性に富んだスキームをつくっています。それがマウル支援センターの支援のしくみです。

## /// 「マウル」という言葉

マウルは韓国語で「村」の意味。もっともソウル市では、日本のような行政区の単位の意味ではなく、「住民が日常生活を営みながら、経済・文化・環境などを共有する空間的・社会的範囲(またその範囲で培われる住民相互の互恵的なネットワーク)」という意味で、マウルが捉えられています。そしてマウル共同体は、「マウルの事を住民が決定して推進する住民自治共同体」のこと。そのモデルになっているのは、60以上の住民サービス事業が住民主導で営まれ、住民がお互いのやかにながっているソンミサン・マウル。そのソンミサンの住民で長年活動に携わってきたユ・チャンボクさんが、現在マウル支援センター長を務めています。



マウル支援センターの壁面には、マウル共同体の活動が写真で紹介されている(写真左)  
マウル支援センター 経営企画室 / 協力支援チーム 広報担当 イ・ウンニムさん(写真右)



センター職員へのヒアリングは「マウルとは何か?」という問い合わせスタート。理念の共有が丁寧に計られている(写真右)。マウル支援センターのパンフレットには、支援のしくみがわかりやすく描かれている(写真中)。住民提案では、平均して10名程度のグループでの申込みが多いという(写真左)



## 2 お金

センターの年間予算は198億6800万ウォン(2013年)。もっともこれはマウル支援センター単独の財源ではなく、そこにはソウル市役所各部局の予算も割り当てられているとのことでした。住民から提案された事業は、マウル支援センターのコーディネーターを通じ、内容に応じて12の事業(2014年)に区別され、市役所の各担当部局へとつながれます。そこで住民と行政が更に検討を重ね、住民側は事業予算の提案をし、それに対して担当部局が適切な予算を割り当てる。つまり、これまで公務員が計画策定してきた行政予算を用いて、住民提案事業が進められるのです。地味なようですが、この予算のしくみもまた、マウル支援事業における行政と住民の協働のあり方を、端的に示していると言えるでしょう。

何がどうなればマウル共同体づくりは成功なのか。その評価指標について、関係者は明言を避け、慎重な様子でした。もっともそれは、マウル支援事業が未来に投げかけられたプロジェクトだからでしょう。ソウル市役所マウル担当官は、事業評価について次のように言います。

マウル支援センターの事業について、議会で最も問われるのはマウル事業の継続性。人々の生活に根ざし、本当に求められている事業になっているのか? 拳い手が生まれているのか? という点が問われる。その点で、自分たちの生活圏(マウル)を自分たちでつくろうとして、主張的に考え行動しようとする人が、ソウル市1000万人の中から5.5万人「登場」したことは、数としてはまだ少ないけれども、その意義は決して少なくない。そう評価するのです。

5.5万人は、単なる参加者としての数というよりも、むしろ、更なるマウル活動や住民相互のネットワークを生み出していく可能性「これから」の萌芽として意味がある。この点で、マウル共同体事業は、短期間に目覚ましい成果を求められる事業ではなく、中長期的な視点から「人をつくっていく」事業として位置づけられています。これがわかります。そして継続性を問うソウル市議会もまた、この問題意識を共有している。マウル支援センターの「人づくり」の取組みは、ソウル市議会の理解を通じた「人づくりを支えるしくみ」の中で、評価されていると言えるでしょう。

## 3 評価

### マウル支援センターを見る

# 3つの視点

## 1 コミュニティ 2 お金 3 評価

## Community

## Evaluation



## ソンデコル・マウル



「エネルギーースーパー」の外観。「スーパー」と言っても商品は一点もなく、ユニークな名前を付けることで地元住民に関心を持ってもらう意図があるそう(写真右) / 子ども図書館内にある電気使用量のグラフ(写真中) / 子ども図書館の外観(写真左) / 新たに企画したお祭りで披露する省エネをテーマにしたお芝居を猛練習中(写真下)

## 電気を消して“希望”を灯す —省エネ活動からはじまるマウルづくり

### 工

エネルギー消費都市から自立都市へ。2012年から、ソウル市では、市民の積極的な参加のもと、太陽光発電などの再生エネルギーの生産拡大と省エネによって、2014年までに原発1基を削減できる代替効果を挙げることを目指す総合政策（「原発1基削減政策」）が進められてきました（本視察時はほぼ達成の見通し）。そうした現状において、「ソンデコル・マウル」は、地域単位で住民自らが再生エネルギーを作り、省エネ活動を通じたコミュニティづくりに取り組むモデル特区として、現在注目を集めている省エネ型マウルです。「フクシマ（東京電力福島第1原発事故）が私たちを変えた」と言う子育て世代の女性たちを中心活動が広がったソンデコル・マウル。34人の地域住民の出資によって設立された「エネルギーースーパー」（協同組合マウル企業）では、地元商店を対象に節

電の「コンサルティング」や啓発を実施、表彰する「優しいお店認定」が行われています。さらに、地元住民の寄付で作られた「子ども図書館」は、節電活動の拠点と共同託児スペースとして大きな役割を担っており、2万2千世帯を対象に、前年比削減した電気使用量をグラフで表示し、各家庭の省エネ競争を誘導する取組みを実施。その他にも、マウル学校を設立し、自宅や知り合いの家で電気の使用法や使用量を診断する「エネルギー・コンサルタント」を養成する省エネ教育を子ども向けに行っています。こうした省エネ活動を中心にして、ソンデコル・マウルでは、役割や活動資源（資金や場所など）を積極的に多くの人たちと分かちあいながら、活動が拡大しており、新たに太陽光発電会社も設立予定。「住民が自信を持つようになった」「移住希望者が増えた」など活動は一歩ずつ着実に進んでいます。



## チャンシン・マウル

視察先4



昨年のマウル支援センター視察の際、「マウルづくりはソンミサン以外でも成功するの？」という質問に対し、「課題があるところでは上手くいく」との返答がありました。その際に、例に挙げられたのが「チャンシン・マウル」だったのです。住民の多くがミシン工など裁縫業に従事し、まち並みも古く、賃金水準が10年来変わっていない。所得水準が高い共働き世帯が中心だったソンミサンとは大違いの場所です。

視察時に案内してくれたキムさんは、ヘンソん地域児童センターのセンター長。実はヘンソんは共同育児に古くから取組んでおり、ソンミサンでの共同育児のモデルにもなったとのこと。自分たちの求めるものを自分たちでつくる「マウルの種」が、チャンシンにも以前からあったのです。もっとも、その萌芽が積極的に芽吹くのは、住民提案を柔軟に支援するマウル支援センターができたからだといいます。

具体的には、古いビルの一階をリノベーションした「モドゥンジ（なんでも図書館）」を拠点とする地域活動のきっかけづくりやミシン工の多い住民向けのコミュニティラジオが、マウル支援センターの支援を受けて運営されています。また同時に、ミシン工によるミシン工の経営コンサルタント企業「チャンシン-table」や、ソウル大の学生によるミシン工の経営機関から支援を受けて活動する人々も、こではお互いにつながっています。こうした立体的な支援の中で、チャンシンに潜んでいたマウルの種は芽吹き、花開こうとしているのです。

## 「マウルの種」が芽吹き始めた ミシン工のまち



## 3つの視点

3 2 1

お金  
評価  
コミュニケーション

## /// 支援プロセス (訪問当時)

3人以上で構成されるチームを基本単位に、企業の成長段階に応じた教育やコンサルティング、資金的支援により、青年社会起業家の育成を行っています。

## 1 ボラキャンペーン

インターンシップや短期就労の機会を提供し、社会的企業との接点を創出する。ここで出会った仲間からチームが生まれることも。

## 2 アイデア大会

自ら関心を持ち実行したいと思う社会的企業のアイデアを発表する。

## 3 評価

ソチヨ・クリエイティブ・ハブでは、初期創業費用や創業スペースの支援を行うだけでなく、企業の成長段階に合わせた教育やコンサルティング、メンタリングを提供する。

## 1 コミュニティ

チームが入居する創業スペースは、共同作業が生まれやすいオープンな空間になっているだけではなく、過去に選ばれた先輩起業家も同居しており、失敗談や成功談を通して身近な経験を共有できる環境が整う。また、座談会や飲み会などの開催を通して、入居者同士や外部の企業とのネットワーキングを積極的に行い、多様な協働を生み出している。

## 4 インキュベーション

青年社会的企業の成長に必要な資金と経営支援を行う「H-ondream」のオーディションを開催する。これから起業する「創業グループ」と、市場展開が難しいながらも革新性の高い事業を行う「開発グループ」の2つに分かれます。

## 5 H-ondream オーディション

書類審査の後、事業別予選（創業グループのみ）と全国決勝がある。ビジネスの実現可能性と社会的価値、事業の革新性など、成長可能性や社会的価値を重視した点数評価を行う。

## 6 H-ondream 支援

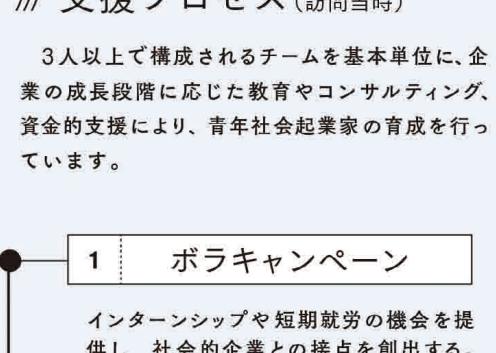
オーディションに選ばれたチームのうち、創業グループには更なる成長支援や資金的援助など、開発グループには個別にカスタマイズした支援プログラムを提供する。

## 7 投資

韓国最大のインターネットサービス会社「NAVER」創設メンバーによる個人基金から投資を行う。

## 2 お金

企業の成長段階に合わせて、助成金や投資などの種別と金額を適切に組み合わせて支援を行う。



創業スペース入口にはインキュベーション支援を受けるチーム名が並ぶ(写真上) / 壁がないオープンな作業空間(写真中) / 奥に先輩チームの部屋があり気軽に相談ができる(写真下)

## /// 社会的企業の育成

ソウル市では、カンナム区のテヘラン路周辺にベンチャー企業やインキュベーション施設が密集し、数多くのIT関連企業が輩出されるエコシステム(生態系)が生まれています。それに対して、seed:sは「ソーシャル・ミッション(社会的価値)」を第一に置き、現代自動車や韓国社会的企業振興院などをパートナーとして、社会的企業の起業から経営、投資までを一貫したプロセスに従い支援を提供します。社会起業家のコミュニティづくりと、企業による資金的支援の橋渡しという役割を担うことでの社会起業家が生まれるエコシステムをつくり出しています。

## /// 事業内容

seed:sでは、青年の雇用や地域開発の問題に特化し、青年社会起業家の育成と革新的な社会的企業モデルの創出を支援しています。特に企業の成長段階に応じた現場レベルの支援を重視。ソチヨ区の青年社会起業家インキュベーションセンター「ソチヨ・クリエイティブ・ハブ」では、社会的企業の発掘から教育、育成を行っています。そのほか、海外での青年インターンシップ支援や、社会的企業の現場を重視した政策開発のための研究を実施しています。

これまでに支援したチーム  
(2011~2014年)

**115** チーム

## /// 理念・歴史

2003年後半から韓国では青年の雇用問題を解決すべく、特に不足する福祉や保育などの社会的サービス分野における雇用創出を目的とした「社会的雇用事業」が始まります。2007年には、より安定的で持続可能な雇用を生むために、欧米の社会的企業モデルを取り入れた「社会的企業育成法」を施行。政府は社会的企業を雇用創出政策の中心に置き、人件費補助や経営コンサルティングなどの支援を拡大します。一方で、多くの社会的企業が政府に財政的に依存していることも現実でした。

そこで、seed:sは市民がより主体的に革新的な社会的事業を創出し、自立した基盤のもとで経営できるよう支援を行うことを目的に、社会的企業支援に携わってきた専門家集団により設立されました。



ソチヨ・クリエイティブ・ハブ(写真左) / プランニングチーム代表 ソ・ユギョンさん(写真右)



視察プロジェクトメンバー

永田 賢介（NPO法人 アカツキ 代表理事）  
松 島 拓（NPO法人 アカツキ 事務局長）  
原口 ゆい（NPO法人 アカツキ 理事）  
仲野 美穂（NPO法人 アカツキ インターン）  
山 内 泰（NPO法人 ドネルモ 代表理事）  
平岡 大典（NPO法人 ドネルモ 理事、通訳）  
宮田 智史（NPO法人 ドネルモ 事務局長）  
桑 山 篤（NPO法人 ドネルモ）  
孔 英珠（九州大学大学院 博士課程）  
中居 真理（アーティスト、京都嵯峨芸術大学非常勤講師）  
馬男木 幸子（社会福祉法人福岡市社会福祉協議会）  
池本 桂子（NPO法人 シーズ・市民活動を支える制度をつくる会）  
岡 本 豊（株式会社 からくりもの）

協力

佐々木 喜美代（NPO法人 アジアン・エイジング・ビジネスセンター 上席研究員）  
南 伸太郎（公益財団法人 九州経済調査協会 研究主査）  
田中 沙季（公益財団法人 九州経済調査協会 調査役）  
原口 尚子（公益財団法人 九州経済調査協会）

通訳協力

KIM MYONGKWON

校正

笛野 正和（NPO法人 ドネルモ）

special thanks

桔川 純子（NPO法人 日本希望製作所 副理事長）

多謝

本報告書制作及び報告会の実施、Webサイトによる情報発信のため、資金面でご支援  
いただいた方々（五十音順）

あいうら様 / 有吉正樹様 / 池本真一様 / 石橋久嗣様 / 石丸修平様 / いちかわとおる様  
いっちゃん様 / 今村秀未様 / 今村寛様 / うしこ様 / 内田友紀様 / エムララボ様  
えりかろ様 / 大澤龍様 / 大田弥生様 / ochan様 / Osamu Kikima様 / ガウディ様  
金子雄一郎様 / かめ子様 / 河合将生様 / 北澤ちさと様 / kura様 / くろろん様  
河内山信一様 / 小島理絵様 / さいとうしのぶ様 / 坂崎あゆみ様 / 笛野正和様  
下野弘樹様 / じんいぬ様 / 早田等様 / 園田江里佳様 / たいちゃん様 / 高橋梢様  
田北雅裕様 / て～様 / timtam様 / TOKYOダーリン様 / 長浜洋二様 / 中村理沙様  
Nishiaki様 / ニシカタシオリ様 / 野崎大雅様 / 早坂毅様 / 兵土美和子様  
フィッシュ明子様 / 福岡佐知子様 / 福島優様 / 福留裕一様 / 本河知明様 / マスコット様  
森元里奈様 / 安川浩平様 / Yukiko様 / Yuki Toyama様 / 吉崎謙作様 / わさわさ様  
WARA様 / わら様 / 匿名希望×2名

※合計で62名の方から376,000円のご支援をいただきました。ありがとうございました。

発行

NPO法人 アカツキ / NPO法人 ドネルモ

Editor

宮田智史

Art Director & Designer

中居真理

発行日

2015年1月15日

発行者

山内泰

〒812-0026 福岡市博多区上川端町9-35

リノベーションミュージアム冷泉荘B55

Tel / Fax : 092-409-5762

マウル  
MAUL-MANDULGI  
マンドゥルギ  
韓国視察レポート

2014

NPO法人 アカツキ

NPO法人 ドネルモ



2013年5月に行ったソンミサンマウル協働視察プロジェクトの概要をフルカラー16Pの報告書にまとめました。その名も『マウル』。下記HPより無料公開しています。その他にも視察の模様を編集した動画もご覧頂けます！

<http://sungmisan aka-tsuki.org/>